

河川改修と福島潟の新田開発

近世の大工事－松ヶ崎掘割－

江戸時代以前は、砂丘に遮られて荒川河口から信濃川河口までの間に、日本海に直接流入する河川はありませんでした。そのため、内陸には広大な湿地が広がり、人々は常に水との闘いを余儀なくされていました。

新発田藩は、紫雲寺潟や福島潟の干拓を目指し、1730(享保15)年に幕府の監督の下、阿賀野川を松ヶ崎で掘り割り、日本海に直接流す工事を行いました。増水分だけを流す予定の掘割でしたが、翌年春の雪解けの洪水で、掘割は本流となりました。この結果、阿賀野川の水位は4尺(約1.2m)も下がり、福島潟周辺には広大な干上り地ができたといわれます。以後、区内の開発は急速に進展することとなり、葛塚をはじめ多くの村が成立しました。

松ヶ崎浜村はこの掘割が本流化し、村が分断されました。松浜は、現在の東区下山地区の人々などが移り住んで、拓いた町だといわれています。

まつがさきあくすいはまごふしんえす
松ヶ崎悪水吐御普請絵図 1730(享保15)年 提供/市歴史文化課

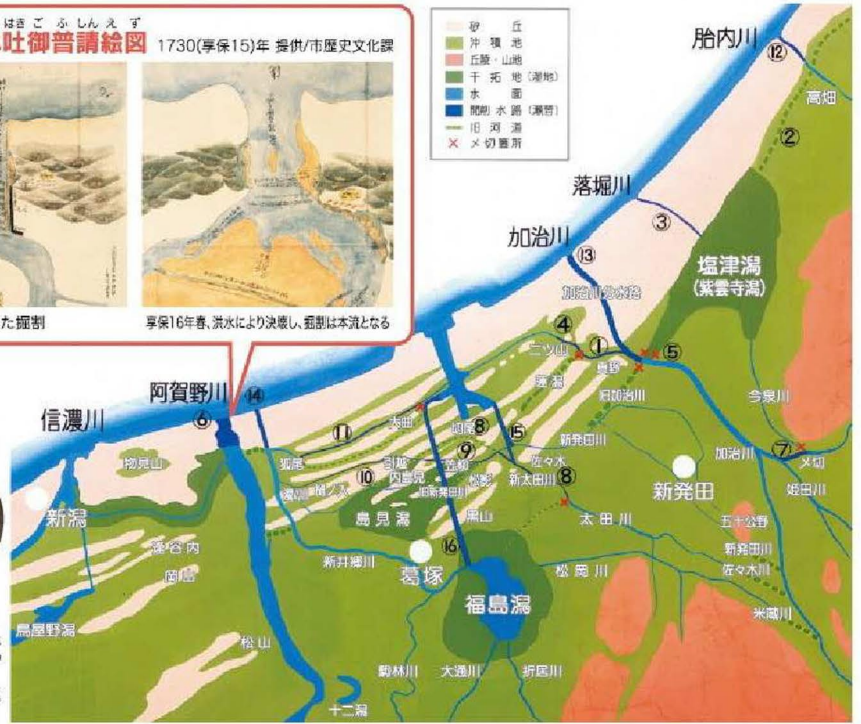


完成した掘割

享保16年春、洪水により決壊し、掘割は本流となる



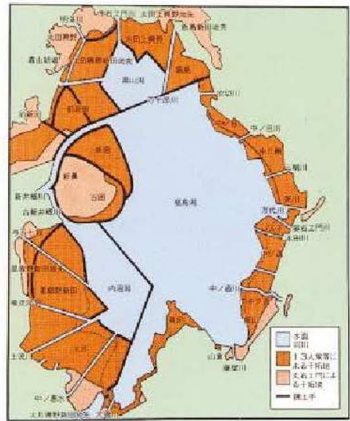
松ヶ崎掘割で出土したと伝えられる越前焼のカメ(江戸時代) 村山家(松浜本町2)所蔵



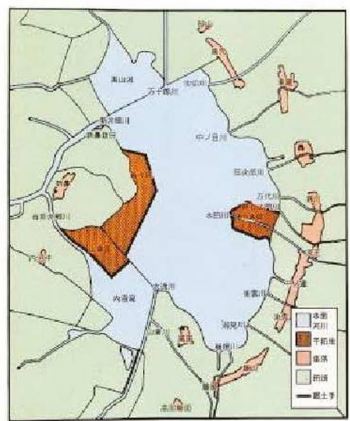
①1655(明暦元年) [加治川] 聖籠新川普請	⑨1781(天明元年) [新発田川] 藤寄と笠柳の間を掘り割り、鳥見潟へ流す
②1698(元禄11)年 [塩津潟(紫雲寺潟)] 高畑村より胎内川へ掘り落とす	⑩1807(文化4)年 [新発田川] 鳥見潟の排水路を切り広げ、引越、樋ノ入を通して本川へ合流する新新発田川を開削
③1721(享保6)年 [落堀川] 長者掘開削	⑪1796(寛政8)年 1862(文久2)年 [加治川] 狐尾・大曲の瀬替え
④1727(享保12)年 [加治川] ニツ山開削	⑫1888(明治21)年 胎内川放水路通水(10月14日 竣工式)
⑤1728(享保13)年 [加治川・塩津潟(紫雲寺潟)] 境川を切	⑬1913(大正2)年 加治川分水路通水(1914年 竣工)
⑥1730(享保15)年 [阿賀野川] 松ヶ崎掘り割り。翌年融雪時の洪水により本流となる	⑭1933(昭和8)年 新井郷川分水路通水(11月、1934年7月1日 新井郷川改修工事竣工式)
⑦1732(享保17)年 [今泉川] 現坂井川を瀬替えし、加治川へ合流させる	⑮1995(平成7)年 新発田川放水路通水(8月3日水害による緊急通水、11月1日通水式)
⑧1760(宝暦10)年 [太田川] 太田川を切、新太田川を開削し、新発田川へ合流させる(新発田川) 大夫興野と藤寄の間を掘り割り、浦ノ入、切尾の間を通し、柳原で本川へ合流させる	⑯1999(平成11)年 新発田川放水路竣工(11月18日)
	⑰2003(平成15)年 福島潟放水路通水(3月16日通水式)

福島潟の新田開発

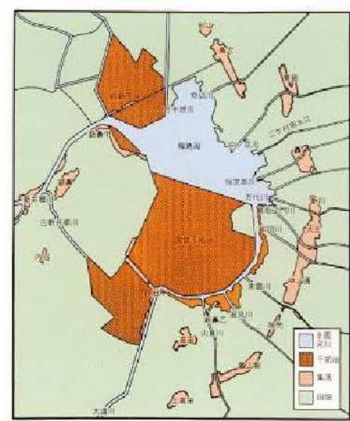
近世の開発



近代の開発



現代の開発



近世の新田開発

幕府は1755(宝暦5)年、福島潟の開発を鉢崎村(現柏崎市)の山本文右衛門に許可しました。文右衛門は潟に流れ込む水量を少なくするため加治川や新発田川の改修、新太田川の開削などを行い、新鼻や太田地区など89町歩(約89ha)を開発しました。

1790(寛政2)年には、水原町の市島徳次郎など水原十三人衆が開発は受け継がれます。彼らは、開発する場所を手手で囲み、水を抜いて水田にする方法や、潟に流入する

河川の上流から土を流し、潟の底を高くする方法をとりました。また、潟の全面開発を目指し、浜茄子新道、山倉新道などの堤防を築き、潟を分割しました。しかし、洪水などにより開発ははかどりませんでした。

1824(文政7)年からは新発田藩が開発を行い、阿賀野川から新井郷川への逆水止めの工事や土流しなどを行いました。十三人衆の開発から1835(天保6)年までに新たに452町歩の田畑が開発されています。その後、新発田藩は、土木技術の限界を認識し、潟

の全面開発を諦め、1855(安政2)年、潟水面540町歩を葛塚の齋藤七郎治や内沼の佐藤名平など地先の庄屋15人に譲渡しました。

近代の新田開発

1886(明治19)年から、葛塚の豪商 弦巻七十郎が潟の水面や新鼻新田を所有し、新々田などの開発を始めましたが、開発は進みませんでした。1911(明治44)年、潟は天王(現新発田市)の市島家の所有となり、山倉田や市島田が造成されました。

現代の新田開発

1956(昭和31)年、国は潟を市島家から買収し、1961(昭和36)年の新井郷川排水機場の完成を契機に、1966(昭和41)年から国営干拓を始めました。北側の湿地帯193haを遊水池として残し、169haの農地を生み出し、1976(昭和51)年3月に事業が完了しました。

この国営干拓事業の完了は、先人たちが行ってきた福島潟の新田開発の長い歴史に終わりを告げるものでした。